

<ミミオ図書館 in 船引 司書ボランティア参加感想>

女川では搬出を手伝い、船引では設営から参加しました。想像以上に色々なやり取りや、推敲があり、たくさんの人の好意や努力や協力のもと、ミミオ図書館は開館しているのだと実感でき、とてもよかったです。鴻池さんの構想のもと、何もない集会場に木のベンチを本棚にして、レイアウトを考え、小さな図書館が出来る様を間近で見られてうれしかったです。想像を具現化する現場を見た！と思いました。

私がいた初日は開館を心待ちにした、子供達がたくさん来てエンドレスの読み聞かせや、皆と一緒に食べたお昼ご飯、突然始まったミミオリンピックなど、にぎやかでとても楽しい一日でした。印象的だったのは、まだ文字が正確に読めない男の子が、ディズニープリンセスの絵本を読んで欲しいといったことが意外に思いました。色々な興味がある年頃に、色々な本に触れ合える機会を作る図書館は大事かもしれないと思いました。普段子供と触れ合う事がないので、ミミオ図書館は自分の先入観に気づく良い機会でもありました。

ミミオ司書たちの報告で、仮設住宅の中と外の人たちが中々触れ合う機会がないとききました。ミミオから帰った後、船引へよく出張に行く姉にその話しをした所、船引はとても近所の人たちのつながりが強いところで、皆が知り合いだから、難しいかもしれないねと話していました。ミミオ期間中、外から来た中学生が子供達に読み聞かせした報告を見て、少しずつでも交流するきっかけになればと思いました。

最後に今回、前日から参加して、色々なボランティアに関わる人に会い、話しを聞き、場所を提供してもらい、様々な面で本当にお世話になりました。石巻から色々な人が関わっていますが、今回あらためて実感できました。この場をかりてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

(本多麻美)

今回は初日の午後と二日目に司書として参加しました。図書館では初日に女の子となぞなぞをしたくらいで、来館者とあまり接することができず残念でしたが、いつも賑わっている、というふうにもいかないでしょう。来館者を待っている時間を過ごすのも、貴重な経験だったと思います。

二日目の夕方、今泉さんに都路を案内していただき、荒れた田畑や朽ちていく建物に、失った時間の大きさを実感しました。人の手が入らないと、かえって雑草や虫が元気だったりもします。また、仮設住宅で暮らすことのストレスや運動場の内と外にある物理的・心理的な壁も感じさせられました。

そうした実情があることを忘れてしまいがちだからこそ、私たちが現地に足を運び、意識し、また周囲に情報を発信することは、ささやかなように見えても、大きな意味があるのではないかと改めて思いました。なにより休校になっている学校が使えるようになって、一日も早い日常が戻ってくることを願います。

後でふと思ったことですが、チラシについて、次の開催時には、子どもが理解できることを意識した、別バージョンをつくってみてはどうでしょうか。

(富重雅也)

前々回の石巻、前回の女川で、津波のすさまじい破壊のあとを目の当たりにした。横倒しになったコンクリートのビル、広大な更地となった空間。うず高く積み上げられた生活の痕跡。そして今回、郡山から船引へ向かう磐越東線のなかであらためて気がついた。車窓の外には、次々と小川や木立が現れ、緑は鮮やかに、水面は澄み切ってみえる。一見何も「失っていない」ように見えるこの場所が、見えない放射能によってかけがえのない自然を「失っている」という現実に。

ミミオ図書館開館日の朝、船引に着いた私は、第二集会所の扉を開けるまで、正直すこし当惑していた。集会所の外壁には東京電力からの賠償実施についての文書が大きく掲示され、当日第一集会所では賠償に関する説明会が開かれていた（私は最初に間違えて第一集会所を訪れた）。この現実と向き合い、日々生活されている方に、私ができることは何だろうと考えつつ、第二集会所の扉を開けると、そこには独り善がりな私の思いなど吹っ飛ばすほど素晴らしい空間が広がっていた。もともと集会所にあった木製ベンチが可愛らしい本棚に変身し、木の温かみそのまま、ほっとする空間を作り上げていた。そして何より、子供たちが本を読み、熱心に絵を描く姿に安堵した。肩を寄せ合って一冊の本をみんなで読んだり、年下の子供に年上の子供が読みきかせをする姿がとっても印象的だった。

回を重ねるごとに、ミミオ図書館は開館場所との（いわば精神的）距離が身近になってきているように思う。何と言っても、今回ボランティアセンターの方々のご尽力が大きく（未だ今

泉さんにお会いできていない唯一の司書ボランティアかもしれない？ 私が言うのもなんだが)、司書ボランティアの宿泊場所までご提供ただけたこと、そして灯まつりに参加させていただいたことで、一過性ではない、継続的なつながりの糸口になったのではないかと思う。私自身、今年は参加できなかったが、来年の灯まつりは絶対に行きたいと考えている。

(松下幸子)

7月30日にミミオ図書館in船引で、入江杏さん(作家)の「読み語りと即興演奏による絵本セラピー」で、音楽を担当させていただきました。入江さんとは何回かご一緒していますが、彼女が子どもたちに読み聞かせをする現場を見るのは初めてでした。彼女の話しぶりに子どもたちがどんと引き込まれる様には、感動しました。私も電子ピアノでいくつかの違う音を選びながら、即興で読み語りの空間にさまざまな音の色をつけていくお手伝いをしました。ご一緒した高橋咲子さんにも読み語りをお手伝いいただき、ち密で繊細な時間を創造することができました。

読み語り後も、子どもたちが残って音楽を演奏したり、絵を描いたり、時間を惜しむようにミミオ図書館の空間と時間を楽しんでくれたのが印象的でした。

地元でボランティアにあたってくださった方々には、細やかな心遣いをいただきました。特に電子ピアノを貸してくださった、今泉さんには心よりお礼申し上げます。

(池田みどり)

わたしは、石巻のあと、船引が2回目の参加です。今回は場所が仮設住宅の集会所、ということでもどんなところだろう、とやや緊張しつつ向かいました。しかし当たり前ですが仮設、と名に付いても人々が普通に寝食して暮らしている場所、全くの「普通」ではないはずですが、落ち着いた、静かな印象を受けたのでした。

その落ち着いた印象は、住んでいる方々がこちらに入ってから時間が経過していること、また、ボランティアセンターの方が集会所に常駐していて何かと目配りされていること、人や物の移送がシステムとしてある程度整っていること、などから来ているのだな、と後から思いました。

集会所では、ふだんからお茶会やいろいろなイベントなどを企画していたり、時間を決めてテレビゲームを出来るようにもしてあるので、子供たちを含めてある程度常連の方々がやってくる、という感じでした。来る子供たちは小学4、5年までで、もっと大きな子、中高生が来るのは年頃の感情からすると難しいだろうな、と思いました。子供たちの親御さんに当たる年代の方達も、忙しそうでお迎えにくる時にちょっとお会いしたぐらいでした。同じ敷地内にもう一つ集会所があり、楽しい切り紙のワークショップをされていましたが、そこで週に何回か住宅内の親御さん同士が教え役になり、夏休みの宿題など見てあげているとか。ふだん忙しい、そのような親世代の方々こそ図書館に来館していただけたら、また、中高生ぐらいの子供にも絵本に触れて欲しいなあ、と思ったのですが一つの空間、限られた時間では難しいのかもしれない。

今回強く感じたのは、子どもたちのものすごいエネルギーです。石巻の時は、子どもだけで来館というのは少なかった気がするのですが、船引では住宅間近の集会所ということもあり、いつもの場所、という感じでとてもリラックスしている感じでした。おいおい、本棚にぶつかるとよ～～、と注意したぐらい子ども同士くっついて暴れたり追いかけてこしたり、と思ったら急に静かになって自分の世界に没頭したり。お絵描きが好きな子が多いのも驚きで、とても上手な子もいました。そしてすごい集中力。興味あることを見つけるとすぐ反応するし、ひと時もじっとしていないで、何かないかな、おもしろいことしたいな、と、パワーいっぱい倒されました。

それから印象に残っているのは、お孫さんがいらっしゃるのだろうなあ、という年代の方たち。図書館に来られた方々も、自分が宿泊した仮設住宅でたまたまおしゃべりした方たちも、今の時間を生きるということを朗らかに、普通に、淡々と続けている、というとても穏やかな雰囲気を感じました。でもそれは、やはり外から短時間立ち寄っただけの人間が感じたことなのかもしれませんが・・・宿泊した仮設住宅では、原発に近い大熊町や浪江町から避難して来た方が多く、最低3年はこの場所に居ることになるだろう、と話されている方もいました。駐車場の片隅で子どもを遊ばせている若いお父さんを見かけて、3年仮の場所に住む、元居た場所に戻れない、というのはどんな感じなのだろう・・・、想像しようとして出来ませんでした。

(斉藤かこみ)

船引のスーパー、船引パークに朝ご飯を買い出しに行きました。広い店内をカゴを持ってうろつきます。生鮮食品の品揃えは豊富です。パック詰めのプチトマトを手に取りました。98円。福島産。九州在住の私はいつも198円ほどで買っています。安さに感激してカゴに入れ、次の瞬間、福島の農産物の現状に初めて触れたことを思い知りました。

灯まつりに、玄葉外相が来ていました。町民のみなさんの前でスピーチをしています。私は夢都路の会のお手伝いをしながら、場違いな格好をした男性が数人いるのに気づきました。暑い中、黒のスーツ姿、ジャケットも羽織っています。屈強な男性たちが、灯をとんでも焼き鳥を食べるでもなく、目をぎよるつかせて辺りを見回しています。外相の警護の人なのだと思います。山に囲まれた静かな集落で、そのような方々に会うとは思いませんでした。灯まつりの会場である中学校は、特別な場所になってしまったことを感じました。

(芝夏子)

今回初めて参加させていただきました。自分に司書が務まるんだろうか、それでもできるだけのことはしたい。緊張しながら船引運動場への坂を登りました。お昼過ぎの到着後すぐ、東京から来られた劇団の人形劇のセッティングが始まり、暗幕が張られてミミオ図書館は早変わり。他の仮設住宅などからも車でやってきた方がいて、子供と大人で二十人ほどが集まりました。劇が終わって風のように劇団の方々が去り、畳の上に本棚を戻した集会所の図書館には小学生の男の子が二人と女の子が二人。いつも集会所で過ごしている子供たちのようでした。

落ち着かない様子の小学校低学年の女の子（今思うと、その日やってきたばかりの司書＝私たち、がいた為落ち着かなかったのかもしれませんが）に話しかけ、「絵本は好き？」と聞いても上の空。「ビデオは見た？」と聞くと、「見てない」と言うので、別室の『たたみシアター』へ連れて入りました。四畳半ほどの部屋にはちょうど誰もいなくて、暗い中二人で並んで座ると、女の子がすぐにビデオに集中するのが分かりました。

画面は「mimio four seasons」続いて「mimio Odyssey」女の子は、「わっ」とか「あっ」とか声を上げ、蜂やナイフを指差して、「ほらね」「やっぱりね」などと私に言い、無声のストーリーの世界に入っていました。女の子が突然、両手で耳を押さえて「うるさい」と言い出しました。ビデオでは波の音に似た低音が流れていました。私は咄嗟に津波の音を連想し、どきっとしてしまい、相槌しかうてませんでした。その後、ドーンという音がしてまた女の子が耳を押さえます。私が「雷、嫌いな？」と聞くと、「ううん」と首を横に振りました。波の音嫌いな？とは聞けませんでした。船引の場所を考えると、女の子が津波の音を生で聞いたとは思えませんが、報道初期の繰返し映像で、波の音を聞いた可能性はあるかもしれません。

でも多感な子が、低音やドーンという音に単純に反応しただけかもしれません。船引から戻って振り返ったときに、目の前にいた女の子にもう少し踏み込んで、女の子のことを理解しようとしなかったことが悔やまれました。もしまた参加させてもうらうことができれば、子供たちが出会う大人としてもっと自覚を持って向き合いたいと思いました。

今回は図書館には半日しかいなかったのですが、畳の図書館は印象的でした。絵本の寄贈者の感想エピソードを読んでいると、この絵本をかつて所有していた方たちがリアルに感じられました。絵本には前の所有者の思い出もあり、移動図書館で旅してくる間にも誰かの手に取られ、今また新しく誰かの思い出になるのかもしれないのです。移動図書館なのですからあたりまえのことで、頭では分かっていたのですが、畳に座って絵本を広げていると、あらためて実感しました。

「震災がなければこの出会いはなかった」被災者当事者だけが使うことが許される言葉です。ドキュメンタリーなどで、被災者自身がそうおっしゃるのも、何度か耳にしました。そのたびに、どれほど複雑な思いでそう言っているのだろうかと考えます。それでもやはり、一年半が過ぎた今は、新しく出会っていくことが日常で現実なのだろうと思います。

2日目は終日、灯まつりのお手伝いでした。灯まつりの会場は、今は線量が高い為に休校となっている都路中学校。日中の校庭には、猛暑と線量の為でしょう、子供は一人もいませんでした。夕方になり、ぽつぽつと子供たちの姿が増えました。竹灯籠が並ぶ校庭で、数人の子がしゃぼん玉を飛ばしていたのが、なぜか印象的でした。虹色の小さな玉の連なりが、風に流されては、淡い水色と朱色の空に消えていました。ボランティアが終わって自宅に帰る途中、家の近所の子が姉弟でしゃぼん玉遊びをしていました。子供たちが同じ遊びをしているのが、うまく言えませんが、心に残る風景でした。

(小野奈津子)

新幹線で2時間弱、あっという間に郡山につきました。

駅前も大きな建物があり、整備された普通の街、という印象でしたが、ひとつだけ異質なものに目がとまりました。線量計でした。船引の運動場につき、奥田さんのワークショップのお手伝いで仮設のお宅を1件1件まわりました。

仮設住宅はそれぞれ同じづくりでしたが、玄関先にきれいなお花が飾ってあったり、トマトを育てていたり、何もなく殺風景だったり、当たり前のことですがそれぞれのお宅で違いました。でも本来ならここは仮設であり、仮の住まいなので、こんなに個性が出るほどの時間住ま

わなければならないというのは、今更ながら何故原発だったのかな、とか、1日や2日で不自由な場所に帰ってしまう自分がこんなこと考えてもいいのかな、等複雑な気持ちでした。

奥田さんのワークショップで喜怒哀楽、それぞれの動きをしたのですが、喜びの時には大きな笑いがおこり、その場の空気全体がまさに喜びでした。みなさんそれぞれ色々あるはずなのに本当に心から笑っているようで、とても胸にささりました。あの場で一時一緒にいただけの方たちなのになんだか今でも笑顔が忘れられません。

ネットのニュースや他の司書の方からのメールで、あの仮設で亡くなってしまった方がいる、とのことでした。人と集まりたいかたや、そっとしておいてほしい方、色々いらっしゃるし、それぞれ事情があるので何ともできないのですが、これからもミミオ図書館のように何かを提供できる場が続いていけばいいと思います。

(高堂典子)

“兎追いしかの山
小鮒釣りしかの川
夢は今もめぐりて
忘れがたき故郷”

二年ぶりに行われた都路灯まつりのステージでこの歌が歌われてるのを聴いたとき、故郷に対する切実な思いが不意打ちのように伝わってきて、胸がつぶれそうになりました。そして船引から会場に来るまでのあいだに車の中から見た風景を思い出しました。作付けが禁止されて草が生い茂っている田んぼ、野菜は作れないけれども手入れは続けている畑…。

離れた場所から原発事故の問題を考える時に、放射能が危険か安全かでしか考えてこなかった自分がとても愚かしく思えました。これからは船引で感じたこと考えたことを忘れずにいたい、ろうそくを並べて作った絆という文字に灯りをつけながら思いました。

(タバツ・ゴリー)

ロンドンオリンピックの開会式と同じ日に、ミミオ図書館in船引は開館しました。

ミミオ図書館では、不思議なご縁に遭遇する事があります。1000冊ちかくの寄贈された絵本を運んでは並べて、その土地の人々に見てもらいます。その数々の中から手にとられた1冊の本に、ちょっと不思議なつながりが潜んでいたりします。ふらっと立ち寄った方の、たまたま手に取った絵本が遠くに住む旧友からの寄贈絵本であったり、私達が、並べながら気になった絵本を開いてみると知人からの寄贈であったりと、特に示しあわせたわけでもないのに、絵本と人がつながっていきます。

絵本には、贈ってくれた人の名前が入っていたり、エピソードが入っています。だから、こういうご縁に遭遇するのだと思います。ミミオ図書館が移動しなければ、つながりが生まれる事もなかったと思います。震災で変わってしまった事もありますが、また、絵本と人がつながる場面を楽しみにしつつ次なる土地でも司書ボランティアとしてお手伝いをしたいと思いました。

一緒に設営を手伝ってくれた子供達、そしてミミオ図書館に来てくれた方々ありがとうございます。

(川上一紀)

数日前に38度を超える熱を出し持病の喘息も悪化……司書としてボランティアに行けるのか…こんな体調で何か出来るのか…不安な数日間。でもどうしても参加したくて、とにかく行けば何とかなるような気がして3日各停電車を乗り継ぎ福島を目指しました。

急な坂道を休み休み登りなんとかミミオ図書館に到着。図書館では机を囲んで今泉さんが明日の灯祭りでは「絆」の文字を司書達に作って欲しいとの提案が……。

4日私は朝から都路灯祭り組。今泉さんが車で都路を案内して下さいました。都路に戻り暮らしている方のいらっしゃる地域には田んぼに稲が青々と輝いていました。しばらく車を走ら

せると…突然荒れた田畑が……。ここからは汚染がひどく農作物を作っても食べられない地域……。私の実家は専業農家、この景色は何とも言えず辛いものでした。

でもその先には……警戒区域。もう立ち入る事さえ許されない地区。自分の家や田畑が有りながらも戻れないのはどんな気持ちなのでしょう…。目に見えない、存在していることも実感出来ない物が、ここには確実に存在している事を私に見せてくれました。

行って見るという事。やっぱり離れた東京でテレビなどで見るのとは違いました。少しずつ除染が進んでいること、除染が終わればまた都路に戻れる地域もあるそうですがまだまだ仮設住宅生活は続くのだそうです。除染と言う方法もお聞きただけで気の遠くなる作業大変な事です。

都路運動場に着くとビックリする数の竹灯。想像を遥かに越えてました。今泉さん、現地の方、司書5人の7人で力を合わせ「絆」完成!!点灯されるまではやっぱりドキドキでした。「愛都路(メトロ)の会」のお手伝い。皆さん明るくて笑いが絶えません。私達はとにかく売るべしと店頭立ち販売のお手伝い。暑さで疲れた身体も皆さんの明るさでご馳走していただいた美味しいけんうどん吹っ飛びました(^O^)

夕刻、美しい夕日と暗くなるほど優しく灯る竹灯は本当に素晴らしく美しかった。「絆」もちやんと読めたし少しでもみんなの心を癒やしてくれたのなら嬉しい。私も都路の灯りやおじさん、おばさん、子供達の笑顔にパワーをいっぱい頂きました

翌日は図書館へ。2人の兄弟と一緒に本を選んで絵を書いてみる。2人とも上手いなあ～っなんてやっているともう搬出準備。子供達もお手伝いしてくれてみんなで仕分けしたり梱包したり。図書館の時間はあっという間でした

搬出日と灯祭りチームだった為あまり司書としての活動が出来ませんでしたが、やはりとにかく行ってやってみる事が出来て良かったです。喘息の発作が治まらず酷かったのにボランティアから戻ってから何故だか喘息が出ていません。不思議です。

皆さんありがとうございました。

(塚原希代)

私と福島県の関係は、近くて遠い関係。祖父・祖母の故郷であり、かつて父が原発で働いていた為、もしかしたら、住んでいたかもしれない場所。しかし、実際には、3.11があるまでは、ほとんど関わる事無く過ごしてきた。

仕事で行き詰まり、メディアから伝えられる被災地と政府との問題点を自身の仕事に重ねながら、何か打破したいと、東北の支援を模索して悶々としていた。そうしたときに、教えてもらったミミオ図書館。司書なんてしたことない。でも、都路の灯まつりが気になる。この壮大な光景をみんなと体験したい。ほとんど、これだけで参加を決めた。特技も何も無い自分。いったい、何が出来るのか？多分、何も出来ない。ただ、街の人と話をしながら、その奥にある思いを少しでも理解したいと思った。1日目はありきたりの会話だったけれど、2日目には、何となく支援する人される人の溝や、小さなコミュニティーでの問題の一端を垣間見た様な気がした。

とはいえ、私自身、学ぶこともたくさんあった。私自身、3.11後に単身引っ越しをしたのだが、もしかしたら、仮設住宅の方々が大変な思いをしているのでは？と電化製品を究極に節約していた。しかし、予想に反して、普通に生活していて、ちょっと拍子抜けしたけど、安心をした。さらに、辛いことを経験しても、希望を失わず、シュールなギャグにしてパワーにしている皆さんの姿は、条件の整った東京においても忘れてはいけないなと。

都路の灯まつりにおいて、風に消されてもあきらめずに1つ1つの筒に燈を届け、広大な景色になったように、希望という燈が消えそうな人にも、誰かが優しさを向けてくれることできっと勇気を持つことが出来るし、感動を与える一人一人になることが出来るのではないだろうか？たった、1日にも満たない活動だったけれど、今回触れた1つ1つが、しっかりとところの中に刻まれている。

どんな環境にあっても、楽しい時間を共有することで、癒され、新たな活動の勇気に変える。あの日にさされたアブの痕はいずれ薄れていくだろうが、この日ことは、忘れないでいたい。今回、機会を与えてくれたみなさまに、こころよりありがとうございます。と伝えたい。本当に、ありがとうございました。

(蔭山雅己)

石巻、女川に続いて船引。今回は、カラダワークショップ「ガガガ体操」の告知に175戸中150ぐらい一軒一軒まわり、参加されない方々ともお話しする機会が持てた。町ごと移住しているだけに隣家との互いの距離感が近いように感じた。

住み慣れた場所への愛着は長く住んでる分子供達より大人の方が強い。一方子供達は放射線量をはかるバッジを身につけ暮らしている。それぞれ、思うところはいろいろあると思うのだが、心がオープンだ。互いに励まし合いながら今ある日々の時間を前向きにとらえるようにしてると感じた。想像力を膨らませながら動く「ガガガ体操」ではそれぞれの豊かな創造力が豊かに湧き出て、参加者でシェアしあいさらに発展。それぞれが人に対し心を開き手を大きく開き、いつでも相手を抱きしめるような印象をうけた。町ごと移動してことが影響してる部分は大きいと思う。

ミミオ図書館司書として皆さんとふれることができ本当によかった。もう少し滞在して、そこに住む方々と新たなプロジェクトを立ち上げるぐらいの勢いで、もっとさきへすすめられたのかも。。と思い出しています。

「人が人によって生かされてる」誰の言葉だったか それを思い出しています。ある意味、人が人によって傷つけられる事である原発問題、その中でも励まし合いながら前向きに暮らす人々の姿。笑顔と笑い声、あふれる創造力、生きる気力のエネルギー源。人が人と共存する事、人と自然が共存する事、今一度本気で考えるときのだと改めて感じています。

(奥田純子)

ミミオ図書館 in 船引では、仮設住宅に泊まらせて頂き、都路の灯まつりのお手伝いもさせて頂いたことで、活動範囲がぐっと広がったように思っています。

印象に残った経験として、1つは灯まつりで「絆」という絵文字を、協力者の今泉さん、現地の方々、司書たちと一緒に、カップに入った蝋燭でつくったことです。正直、絆という言葉は、現地に行くまではピンときませんでした。東京にいる時は、どこか白々しくも聞こえていました。でも、都路のグラウンドで炎天下のなか、文字の大きさやバランスを測ったり、こういう

字だったのかぁなんて思いながら、現地の空気を吸いながら描いているうちに、その言葉の重みや意味を感じた気がしました。きつい陽射しも何のその、夢中で「絆」をつくっていました。そして、屋台での焼きそばづくり、焼き鳥売りも夢中でした。我を忘れるってこういうことかな、また少し移動できたのかなと思いました。

もう1つは、最終日の図書館で地元の婦人会の方が、「おおきなかぶ」の読み聞かせを始めた時のことです。即興で、お友達の名前を入れたり、話を少し変えたりしながらの面白い読み聞かせでしたが、途中で放射能汚染をとりあげたブラックなジョークもまざっていました。その時、婦人会の方々はどっと笑い、司書たちの顔は一瞬曇りました。どういう受けとめ方をするかは人それぞれですが、私は迷いながら少しだけ笑ってみました。あまり感情をこめずに、目の前の人が笑っているから笑ったという感じです。灯まつりで行った都路の景色を見て、本来なら仮設住宅の方たちは、あの美しい田畑を耕し、あの街でこうして笑いながら生活をしているはずだけど、今は「本来」なんて飛び越えたところで生きていると感じました。だから、私も本来笑うべきではないところで笑ってみました。

(坂本里英子)